

Essay

Sapiarc.com

2011年1月10日(2011-01)

新年雑感

例年どおり、今年も多くの方々から年賀状をいただいた。年賀状というものは、もらうのは嬉しいものだが、出すのは面倒だと感じるときもあるのではなかろうか。正直なところ、私はそう感じたことが多かったし、とくに職を離れてからはそう感じている。しかし、出すのを止めるには、かなりの決心が必要なので、前年とほぼ同じように出すことになる。シニアな方から、年賀状は今年で終わりにするとわざわざ書いたものをいただくことも増えてきた。人生の段階のひとつとして自然なことだと思う。いずれ私もそういうことをするかもしれない。

年賀状にはいろいろな情報がある。自分と家族の現状を書いたものが多いのは当然だが、前年の国内旅行や海外旅行について書いている人たちも多い。現職にある人たちが、国際会議に出席したついでにした観光の様子を書いていることもあるが、多いのはシニアな夫妻が海外旅行に出かけたというものだ。

シニアな人たちが、かねてから行ってみたいと思っていた海外の名所などに出かけるというのは、大変良いことだし、羨ましいと思わなくもない。しかし、実のところ、私の思いはもう少し複雑だ。つまり、今の私には、どうしても行ってみたいところはなく、行きたいという気持ちも強くないということだ。

私が観光目的の海外旅行に熱心でない理由は、少し傲慢な言い方かもしれないが、私は、本当に行ってみたいと思っていたところには大体行ってしまったと思っていることだ。世界は広く、まだ行っていないところの方が既に行ったところよりも遥かに多いのだから、何故もっとあちこちに行ってみたくないのかと問われると、返す言葉はない。しかし、歳のせいか、まだ見ぬところに積極的に出かける気にはなれないのだ。

自分が何故観光目的の海外旅行をしたいと思わないのかを分析してみると、その理由はふたつあるようだ。ひとつは、私が興味や親近感を抱いてきたのは西ヨーロッパと北米であって、それら以外の場所への関心は高くないと言わざるを得ないことだ。これは、アジア太平洋戦争での敗戦ということがあったにも拘わらず、私が明治以来の日本人の西欧（西ヨーロッパと北米）志向の中で育ち、研究教育活動もその中でしてきた人間であり、現在のグローバル化にはついて行けていないということだ。この点では、自分と同年代の人たちと比べても、私はとくに西欧的思考が強いのもかもしれない。ヨーロッパの没落ということが言われ始めてから、既に百年を経たと思うが、私は依然として西欧的なものの価値を低くみる気にはならないのだ。

1966年9月、私は初めてミラノの大聖堂（イタリア語では〈duomo〉ドゥオーモ）を見た。このとき受けた衝撃は未だに忘れら

れない。私は、その前の1年間をアメリカで過ごしており、ニューヨークやボストンなどアメリカの大都市を知っていたにも拘わらず、ミラノは全く別のヨーロッパの歴史と文化を突き付けてきたのだ。これは、16世紀の終わりに、天正遣欧使節の少年4人がポルトガル、スペイン、イタリアを廻って、1585年ヴァティカンに至ったときの状況と似ていたかもしれない。

私にとって、ミラノで過ごした1年間はヨーロッパを体験する貴重な期間になった。イタリアには、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ、ナポリなど伝統文化がぎっしり詰まった都市があり、ミラノを中心とする北イタリアや隣接するスイスには美しい景観がどれほどたくさんあることか。また、足を延ばして、フランス、ベルギー、イギリス、ドイツ、スペインにも滞在した。1966年9月からの1年間に得た経験と思えば、かけがえのないものであり続けている。それが、私の他の地域への関心をそぐ方向に働いてきたように思う。

私には、若いときに見たものをもう一度見たいという気持ちがある反面、それは止めておく方が良いという思いがある。イメージと感激の記憶を壊したくないからなのだ。実際、かつて見たものが余りに変わってしまっていて、逆のショックを受けたことがあるからだ。これが、私が観光目的の海外旅行に熱心になれないもうひとつの理由なのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチが15世紀末に描いた「最後の晚餐」は、ミラノ旧市街にあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会（訳せば「恩寵の聖母マリア教会」ともなるだろう）に付属する建物にある。この場所はドゥオーモから少し南西に当る。1966年12月8日に私は家内と2人でここを訪れた。この日は（聖母マリアの）無原罪御宿りの祝日で休日だった。ダ・ヴィンチは、この教会に付属していた修道院の食堂の壁画として「最後の晚餐」を描いたのだが、この壁画ほど修道院の食堂を飾るの

にふさわしいものはないだろう。私たちがこの元食堂に入ったとき、他に入館者はほとんどいなかった。私たちは薄暗い大きな部屋のなかで、ゆっくりとこの有名な壁画に対することができた。相当痛んではいたものの実に和やかな雰囲気のある壁画だった。私は見に来て本当に良かったと思った。

ルネサンス期の壁画は普通フレスコ画だが、「最後の晚餐」はテンペラ画だ。フレスコ画は壁が乾かないうちに絵具を塗って描くものだ。壁と絵が一体になるので、描いた絵の手直しをすることはできない。これに対して、テンペラ画は乾いた壁に描くので、手直しをすることができる。ダ・ヴィンチはテンペラ画法で3年間をかけて「最後の晚餐」を描いた。それ以後の長い年月の間には、何度も修復作業が行われたようだ。

第2次世界大戦中、1948年8月の連合軍の空爆によって、ミラノの中心部は大きな被害を受けた。この元修道院食堂も被弾して、屋根や壁が崩れ落ちたのだが、奇跡的にこの壁画のある壁面は残ったのだ。しかし、それから約3年間非常に悪い状況に置かれていたので、壁画はひどく痛んだと言われている。

1970年代の半ばから約20年をかけて、この壁画に対する大規模修復作業が行われた。担当したのは女性の修復専門家だが、この人の手法には手厳しい批判もあったようだ。それはともかく、1990年代になってから、修復された「最後の晚餐」が公開された。1997年のゴールデンウィークに、私たち（家内のほかに娘と家内の両親も一緒に、またツアーの同行者も居た）はこの修復された「最後の晚餐」を見に行った。

現地に着いて、私がまず驚いたのは、見に来た人が多いことだ、入館するために、外の広場のようなところに長蛇の列ができていた。簡単に入館できそうもないので、私たちは、ツアー同行者に列内の順番を確保してもらうことにして、近くの喫茶店に行き、カプチーノなどを飲んだ。1時間以

上経ってから、ようやく入館できたと思う。ところが、館内の様子は昔とは全く異なっており、「最後の晚餐」はガラス板越しでしか見ることはできないようになっていた。昔は薄暗い場所だったが、かなり明るくしてあり、壁画を見るという点では良くなったが、昔の雰囲気は全くなくなってしまっていた。入館者数を制限してはいるのだが、それでも大勢の人が居るので、とてもゆっくりと見るというわけにはいかなかった。私がかっかりしたのは言うまでもない。

世界的に観光旅行が盛んになるなかで、あちこちの名所の状況が変わって行くことは止むを得ないことかもしれない。マドリードのプラード美術館にあるピカソの「ゲルニカ」は、1967年には美術館内にあったが、1985年には特別に作られた別館に移されていた。これはセキュリティ面での要請によるものようだった。

現在の状況が元の状況と同じでないかもしれないことを気にして、再訪することに慎重になるというのは歳のせいだと思うが、私の現状はそんなところだ。（おわり）